研究員報告

地域の特色ある教育で次の時代を支える人材育成
～ＳＢＰ（ソーシャルビジネスプロジェクト）の取材より～

（公財）えひめ地域政策研究センター 研究員 **和田 健太郎**
〈協力〉一般社団法人 未来の大人応援プロジェクト 代表理事 **岸川 政之 氏**

ＳＢＰ（ソーシャルビジネスプロジェクト）をご紹介します。これは、地域の課題に対してビジネスの手法を用いて解決していこうとする高校生たちの取組を地域で応援し、支援するプロジェクトです。自分たちの地元にある資源（ひと・モノ・自然・名所旧跡・産業など）を見直し、活用して、〝まちづくり〟や〝ビジネス〟を提案し、地域と連携しながら生きた社会実習が行われています。２０１１年に三重県立相可（おうか）高等学校食物調理科をモデルとしてドラマにもなった「高校生レストラン」の仕掛け人である岸川政之さんが代表理事を務める未来の大人プロジェクトによってこの取組は今、全国の高校に広がっています。

①高校生レストラン「まごの店」～「せんばいの店」

三重県多気町に高校生レストラン「まごの店」があります。２００２年、当時三重県多気町役場で町おこしの仕事をしていた岸川さんが、地元農産物をＰＲするイベントにおいて試食の提供を相可高校に依頼したことがきっかけとなり誕生しました。相可高校から提供された料理は、まるでホテルのディナーのような出来栄えで、スーパーマーケットの試食コーナーをイメージする岸川さんの期待を大きく上回りました。また、頼まれたわけでもないのに来場者に一生懸命に料理の説明をしたり、取り分けをする高校生の姿に岸川さんは心を打たれて相可高校との交流が始まりました。町づくりのため農産物を広くアピールしたい多気町と、調理師免許を取得するために勉強に励む生徒を、授業よりも緊張感のある現場で鍛えたい学校の思惑が一致して、高校生レストランが始まりました。

この高校生レストラン「まごの店」は部活動の一環として行われるので、営業は学校が休みの日に限られます。開店日に生徒たちが学校に集まるのは６時です。開店準備が完了した８時半ころ、朝食を立ったまま済ませて開店に備えます。連日行列ができ、用意する２５０食はすぐに完売します。後片付けが終わった夕方にやっと昼食を食べることができます。「部活動だからやめてもいい。しかし彼らには夢があるからやめません。」と岸川さんは言います。指導するのは、調理師学校の講師から転身した村林新吾先生です。調理場を客間より明るくしたり、調理場の様子をモニターで食事を楽しむお客さんに見てもらったりすることで生徒たちに緊張感を持たせるための工夫がされています。下準備や調理、接客などすべての業務を行う生徒たちは、技術がなければ出番を失う厳しさも味わっています。生徒たちは、自分たちが料理をすることでまちが元気になっていることに誇りを感じ、将来は地元で店を開きたいと考える生徒もたくさんいます。

そこで、２００８年には、高校生レストランの卒業生の受け皿となる惣菜店「せんばいの店」が誕生します。岸川さんが社長となってくれる人を探し、銀行からの借り入れを実現してオープンさせました。地元で鍛えられた若者が、地元の素材を使って調理した惣菜を販売しています。ここでも新鮮な野菜を提供してもらう農家と協力関係が築かれています。農

家は野菜をおいしい料理にすることで評価されることを喜び、運営にあたる〝まごの店卒業生〟も、毎日工夫を重ねることで、「せんぱいの店」を進化させていきます。

②ＳＢＰ（ソーシャルビジネスプロジェクト）高校生交流学校訪問

熊本市から有明海、雲仙を眺めながら車で2時間、「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」の世界文化遺産登録で湧き上がる天草市の熊本県立天草拓心（たくしん）高等学校（河浦高校園芸化学科、苓明高校、苓洋高校が統合し２０１５年開校）にて２０１８年９月、ＳＢＰ高校生交流学校訪問が行われました。

交流会ではまず、三重県立南伊勢高校南勢校舎の生徒４名が南伊勢高校ＳＢＰの取組を発表しました。三重県南東部に位置する南伊勢高校は、２００４年に度会高校、南勢高校、南島高校を統合して開校しました。南伊勢町は三重県内でも過疎と高齢化の進む町で、現在の人口は約１４０００人です。20年後には、人口が半減すると予想されています。２０１１年、廃校の危機にあった南伊勢高校は、当時の多気町まちの宝創造特命監であった岸川さんの講演を聞き、自分たちにもできることがあると立ち上がり、２０１３年から南伊勢ＳＢＰとして活動を始めました。

南伊勢ＳＢＰはまず「地域の宝探しプロジェクト」に取り組みました。地域の宝を探すために町を歩き、商店を訪問し取材を進めました。それまで地域との関わりがほとんどなかった生徒たちは、自分たちの住むまちに誇りを持つことになりました。次に彼らは、自分たちも南伊勢町らしいものを作りたいと思い、南伊勢町のゆるキャラ「たいみー」の形をするたい焼き風お菓子「たいみー焼き」を作ることにしました。しかしここですぐに問題が発生します。業者に頼むと40万～50万円もかかってしまう「たいみー焼き」の金型の調達方法です。有志の生徒数人でのプロジェクトでは到底用意できません。そこへ岸川さんから、金型製作の技術を学ぶ沖縄県立美里工業高校の話を聞き、全員一致で製作を依頼することとしました。その後実際に、同校を訪問し、自分たちが持つ地域に対する思いを伝えるなど金型製作のための交流もしました。そして沖縄の高校生が毎日夜遅くまで励んでくれたおかげで、2枚焼きの金型が完成しました。こうして、出来上がった「たいみー焼き」を地元の人にふるまうための試食会を開催すると、1時間半待ちの行列ができるほどの大盛況となりました。

ふるまいでの実績を踏まえ、町への補助金を申請したところ認められ、セレクトギフト（後述）の売上と合わせて、デザインは同じですが一度に10枚焼ける大型の金型を購入することができました（この金型はもちろん美里工業高校によるデザインです）。以後、様々な団体から「たいみー焼き」の出店依頼を受け、大人気となっています。将来的には、常設店舗を構え、定期的に販売活動をしたいと考えています。

そして多くの人に支えられたゆるキャラをモチーフとした「たいみー焼き」の取組は新たな進化を遂げ全国へ広がりを見せていきます。伝統技術の瓦と最先端の自動車産業の盛んな愛知県高浜市にある高浜高校ＳＢＰの「Ｓの絆焼き」は、たいみー焼きをヒントにして作られました。高浜高校の生徒が全国各地の高校生等から希望するオリジナルデザインの焼き型を受注し、地域の瓦職人が立体的に表現し、自動車部品メーカーが最新機器を用いて金型を作製します。高校生と地元産業が連携して作った金型を用いた「Ｓの絆焼き」によって高浜高校ＳＢＰが地域を盛り上げていきます。このように「たいみー焼き」は全国の高校生による地域活性化のモデルとなっています。

もうひとつの取組である「セレクトギフト」について紹介します。これは、まちの魅力を知ってもらうために南伊勢町の企業が作る商品を高校生が組み合わせて、商品説明や販売を行うものです。セレクトギフトは商品選定から始まります。仕入れ交渉などの商品開発を生徒が行います。心をこめて箱詰めするギフトには商品の他、紹介文や食べ方、ギフトの楽しみ方を書いたギフトブックや、高校生の思いを書いた「ふるさとからのラブレター」と

アンケートを同封しています。アンケートの返信を基に検討を重ねることで、新しい発見がありました。南伊勢町は漁業の町であるのに、鯛や鯖、アッパッパ貝などの新鮮な生の商品を入れたことがありませんでした。今後は加工品だけでなく、生の魚をクールパックで販売したいと考えています。南伊勢高校の生徒たちは、町内の業者を訪問し、生産者、注文した人、受け取った人すべてが笑顔になれることを願って活動を続けています。

南伊勢高校南勢校舎の生徒の取組発表のあと、天草拓心高校本渡校舎（普通科・商業科・生物生産科・食品化学科・生活科学科）、マリン校舎（普通科総合コース・海洋科学科）と南伊勢高校南勢校舎の生徒での交流が行われました。天草拓心高校の7学科でそれぞれ行われている取組が紹介された後、高校生同士で意見交換をしました。どうしてSBPを始めようと思ったのですかと質問された南伊勢高校の生徒は、「南伊勢が好きだから」「SBPをがんばる兄の姿を追って」「人前で話すことが苦手だった自分を変えようと思って」など。一方、天草のよいところはどんなことですかと聞かれた天草拓心高校生は、「海がきれい」「夕日が落ちる」「山もきれい」「天草の人はみんなやさしい」「天草に残って何かしたい」「イルカが好きで、県外から移り住んでくる人もいる」と次々に堂々と我がまちの自慢をしていました。活発な意見交換が続く中、まちの課題に関する話題も出てきました。南伊勢高校のある地域はリアス式海岸で、今後起こるであろう大地震に備えることも大きな課題となっています。そこで1つの提案が出されました。天草拓心高校には、本渡校舎に食品の製造を学ぶ学科、栄養を学ぶ学科、POPを作ることのできる商業科があり、マリン校舎には、魚介類を捕って加工ができる海洋科学科があります。学科を越えて力を合わせ、お年寄りやアレルギーのある人にも対応する非常食の開発・販売をすることが、災害時の人助けにつながるのではないかという交流会ならではの新しいアイデアが生まれました。

③全国高校生SBP交流フェア

平成30年8月17日、18日。三重県伊勢市にある皇學館大学に全国から28の高校が集まり、「第3回全国高校生SBP交流フェア」が行われました。文部科学省の共催、自治体、地元企業の後援により年々高まりを見せる高校生による地域活性化の取組を支援しています。参加した高校生たちはポスターセッションで日頃の取組を紹介し、決勝大会に出場する7校が審査されました。夕方からは、商店街にて「夜の市」を開催し、高校生たちの商品が販売され、地元客で賑わいました。地元商店街もかつての賑わいを取り戻して、地元で商店を営む人からも好評でした。2日目は、決勝大会に残った7校によるプレゼンが行われました。また、高校生にアドバイスを送ろうと、ビジネスの第一線で活躍する参加企業によるワークショップが行われました。高校生同士の交流も盛んに行われました。最後は、相可高校「高校生レストラン」の生徒によって作られたバイキング交流会にて参加者は健闘をたたえ合いました。この交流フェアは、地元の大学生や高校生たちの運営により行われました。

④夢をもつこと　高校生の可能性は無限大

熊本県立天草拓心高校本渡校舎、マリン校舎での講演会や交流会において岸川さんは、高校生に対して「夢をもつこと。高校生の可能性は無限大であること。」を伝えました。

廃校の危機にあった南伊勢高校の生徒たちの活動は多方面で評価されました。その彼らの行動が地域住民や行政の人の心を変化させました。彼らの活動は、南伊勢高校を多くの人に知ってもらうことになり、その取組は全国に広がりを見せました。岸川さんは、自らの経験を基に「みなさん夢はありますか？」と問いかけました。岸川さん自身は、高校生のときに、人前で手を挙げて意見を発表することはできなかったし、夢を持つことができなかったそうです。40歳を超えてやっと自分の夢を持ったということです。高校入学時にはすでに将来の目標を定めて

いる高校生レストランのモデルとなった相可高校の生徒たちは、お手本にならないくらいの強い行動力を示しています。そこまでは難しいけれど、夢を見つけて行動を起こせる人になって下さいと言いました。講演の終盤、質問タイムがとられましたが、生徒たちはなかなか手を挙げられませんでした。気まずい沈黙の時間が流れる中、一人の女子生徒が手を挙げました。「40歳になって岸川さんが見つけた夢とは何ですか。」その答えを聞くことができたのは、勇気を出して手を挙げた女子生徒のおかげでした。「残りの人生は自分のために生きようと思いました。自分のやりたいことや、やった方がよいと思うことに対して、眉間にしわを寄せることなくすっとできる人間になろうと。自分がやりたいからする。そのことが、周りの人の喜びや幸せと重なる部分が多い人間になりたいと思っています。人のためにやっているわけではありませんが、そうなるためには自分が光って人に必要とされる人間にならないといけないと思いました。だから一生懸命勉強しようと思っています。」と答えました。「ぼくは高校生のとき、この場で手を挙げられないと思う。手を挙げた彼女は、未来を変えられる行動力を持っています。質問してくれてありがとう。」と続けました。

ＳＢＰは、地域を元気にさせる共通の目的のもと、高校生が交流することによって意見を交換したり工夫したり、真似をしたりすることで進化しています。そこには、高校ごとの取組だとつまらないという岸川さんの思いがあります。みんなつながっていること、他の高校の取組を見て、これだったらできると真似をすることから始めること。アイデアを共有し、少し工夫を加えてみんなに見てもらうことで進化しています。やりたいと思ったことをやってみる。評価されるといろいろな意見がでます。もちろん批判やクレームも。それをオープンにして、課題を解決していくことが繰り返されています。

岸川さんは、「世の中を動かすのは大人です。しかし、高校生の君たちは子どもではありません。未来の大人です。いい大人になって、世の中を動かしてほしい。」と言いました。地域に残る人材を作るためにＳＢＰは必要です。大学も地域に残る人材を地域の大学で育てようという動きがあります。廃校の危機にあった少人数の小さな学校の取組が人々を動かし、彼らの行動が学校を残したいという地域の気持ちとなりました。この取組は、さらに広がりを続けています。

高校生レストランは、９０００万円かけてスタートしました。詳しくは話されませんでしたが、当時は反対意見もあったはずです。しかし今や毎年４０００万円を上回る売上があります。セレクトショップも、引き継ぐだけではモチベーションが低下してしまうため、毎回選ぶ商品を見直して販売をしています。絶対に原価を割らないこともルールとしています。ビジネスとして商売の厳しさから逃げないために仕入先に甘えないことがその理由だと考えられます。いずれの活動も、ビジネスとしての成果がはっきりと表れています。そこには、学生だから大目に見てもらおうという考えは見えません。本物を提供することや、それぞれが自立するシステムを構築され、そこで力を付けた若者が地域を支えています。

南伊勢高校の生徒、天草拓心高校の生徒もそれぞれが自分の地域や学校に誇りを持ち、魅力を発信していました。それを見つけていること、他人に伝えることができる彼らの周りには、小さな子どものころから立派な大人の存在が近くにあったように思いました。

岸川政之氏

１９５７年生まれ。大学卒業後多気町役場に勤務する。多気町役場を退職後、現在は一般社団法人未来の大人応援プロジェクト代表理事。皇學館大学現代日本社会学部教授。百五銀行地域創生部顧問。まちの宝創造アドバイザー。総務省「地域力創造アドバイザー」。内閣官房「地域活性化伝道師」。著書「高校生レストランの奇跡」。